

Curious Eyes of a Witch

過去100年未来100年、みんなの心に届く光のデザイン
平成のシンボル“東京スカイツリー”のライティング

戸恒 浩人
照明デザイナー



仁木 洋子
空間演出プロデューサー



若手デザイナーの起用

仁木 (今号が発行の頃は開業していますが) 開業を控えた東京スカイツリーの照明デザイナー、戸恒さんに、現在の心境を伺いましょう。

戸恒 ちょうど昨日、スカイツリーライトアップの全点灯を無事終え、ある意味ひとつの山を越えた瞬間でほっとしています。

仁木 お仕事が決まったのは、2007年の8月。照明が5年前から、と一般の方は驚かれるかも。

戸恒 照明の仕事は幅が広く、大きくは舞台やテレビ、建築、店舗とあります。建築照明は、一番長い時間残して常に点灯しなくてはいけないので、建築が終わってからでは遅いんです。作りながらどこに配線するかとか、重い照明器具を乗せるために架台を置く場所を設計するなど、後から言っても、その段階では危険だからだめと言われる。建築と歩調を合わせて進めていくのが建築照明の特徴です。

仁木 新しい時代のシンボルですから、個人的には若いデザイナーにと望んでいました。世界一のタワーライティングをされた後、次の作品がいくつも楽しめる方に…戸恒さん



に決まって、嬉しかったです。

戸恒 ありがとうございます。僕からすると、選んだ方がすごいと思いました。

仁木 確かに!日本は捨てたものじゃない。ビッグプロジェクトの場合、安全策を取りがちですが、さすが平成のシンボルをおつくりになる方たちの選択だと感心しました。

戸恒 もし僕が審査員だったら、「こいつに頼んでほんとに大丈夫かな?」と思ったでしょう(笑)。スカイツリーのニュースは、テレビの前で見ていたので、当事者になるなんて想像していませんでした(笑)。

仁木 当時は30代になったばかりですね。

戸恒 はい。本当に責任は大きいんです。クライアントはスカイツリー社ですが、スカイツリーの後ろにい

る東京都民全員の生活に入り込んでしまうのですから。

日本人の心意気、美意識を纏う光“粋”と“雅”

仁木 戸恒さんの展覧会「東京スカイツリー+10」で拝見しましたが、2つのライティングが、交互に見られるのですね。

戸恒 心意気の“粋”は、隅田川の水をモチーフとした淡いブルーの光でタワーを貫く心柱を照らすライトアップです。

美意識の“雅”は、江戸紫をテーマカラーとし、金箔のようなきらめきのある光をバランスよくちりばめ、細やかな構造体を衣に見立て優雅で気品あるデザインにしました。

仁木 “粋”と“雅”の2つにされたのは、どうしてでしょうか。

戸恒 デザインして生まれた子ど

もが双子だったんです。これをどうやって見せようかなと、時間帯で入れ替える案も考えたんですが、スカイツリーを日没から夜遅くまでずっと見ている人もそんなにいないし、わかりにくいと思ったんです。

それで、一日一瞬見たときに感想をもってもらうにはどうすればいいかと考え、パツと閃いたんです。日替わり弁当だったら、小さい子からおじいちゃん、おばあちゃんまでみんな馴染んでくれる。「今日は“粋”だから、明日は“雅”を見られるんだな」とか、マニアックな人なら、「今月の偶数日は“粋”だな」と話題になる。一泊のところを二泊してみようとか、グッズも必ず2つになる…など波及効果も望めるでしょう。

仁木 愉快な方ですね。シンボリックなものって、みんなが楽しめることがポイントだと思います。

デザイナーは、とかくプロに評価されることが価値だという人もいますが、多くの人々に支持されることは大切です。外国人も来日した日と違うライトアップを次の日に見かけ

たら、東京を訪れた思い出がより印象深く、みやげ話として、家族や友人に話さざらうって想像するとワクワクしますね。

徹底的にこだわり抜く

仁木 634mの世界一高いタワーで、ご苦労も多かったことでしょう。

戸恒 とにかく提示したものは必ず実現するんだと、鬼のように「だめだ、こんなじゃ」と言い続けてパナソニックさんと進めてきました。二日徹夜して目の下が隈だらけでも、もう一晚徹夜して、という繰り返しでした。

仁木 その頑張りが大事!その手前で妥協してしまうと、もうちょっとやっておけばよかったと、必ず悔しい結果を招きます。

戸恒 最後の方は、品質管理に注力しました。現場での折衝は日建設計さんと一緒にやらせていただき、立場としては判断することが仕事でした。過程では分かれ道があるんです。「ここは許せる、許さない」といった具合。変な話、僕は段々

と自分がジョッキーになったような感覚で判断しました。本人が適当では、頑張ってきた人をがっかりさせてしまいます。「辛かったけれど、頑張ってたかった」と思わせないといけないですから。

仁木 一所懸命にやった仕事は、辛くても心がつながりますね。

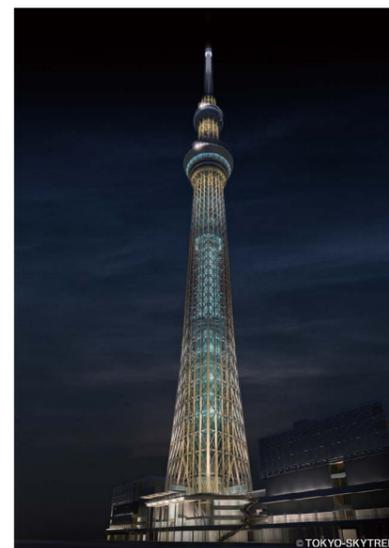
戸恒 5年間長かったな、という思いと同時にこれをつくるにはやっぱりエネルギーを費やさなきゃだめなんだということも感じました。手を尽くしたものって、一見シンプルでも格段に美しい。“粋”の回る光一つでも5回やり直しています。そういうことを積み重ねて、本当にいいなと思えるところまでやりました。

仁木 近隣の方は、何回かテスト照明をみていらっしゃいますが、昨夜は大評判で、「想像以上に美しかった」と、今朝のニュースで流れていました、おめでとうございます。

戸恒 試験点灯のときには、イベント仕様の淡いピンクや黄色などもやっています。実際には数字を入れて表現しますが、CGでリアルに作り込んでも、画面上と現場はまったく色が違うんです。

テストを繰り返し、チェックしているときに、あるベストポイントに行ったら、アマチュアカメラマンの方でゴった返して、「毎日撮っているんですよ」とスクラップブックを見せてくれ、全部の試験点灯パターンが並んでいるんです(笑)。

スカイツリーのライトアップは、自分のデザインですが、その感覚は消えて、もう、みんなのものにな



東京スカイツリーライティング「粋」



東京スカイツリーライティング「雅」



HOUSE N

りました。

仁木 わかります、私も大勢の人が参加してくれたプロジェクトは、みんなの空気感を肌で感じます。

戸恒 ええ、そっちのほうが嬉しいですか？

仁木 もちろん！

戸恒 自分だけが満足するより、周りが何倍も喜んでくれるのが、ものづくりやデザインの仕事をしていて、いちばん嬉しい部分です。

星を観るのが好きな少年

仁木 照明との出会いは？

戸恒 僕は星を観るのが好きだったんです。

仁木 東京で星が観えました？

戸恒 東京っていいんですよ。空が澄んでいるわけではないから、ずっと目を凝らして星を探すんです…目が慣れてきて段々と星が見え

てくる。たまに山の奥で星を見ると、たくさんありすぎて気持ち悪くなっちゃう(笑)。東京は、徐々に増えてくる楽しみがありました。

小学校5年から、ベルギーに住みましたが、ヨーロッパの街って光の扱いがすごく上手なんです。夜の街が本当に暗くて、時々パシッと教会がライトアップされていたのを覚えています。当時は照明デザイナーというマニアックな道に進むとは思っていませんでしたが、光と影がつくる素敵さを感じました。そして、日本に戻ると、光はただ明るくて、機能主義で、文化的ギャップを感じました。

仁木 蛍光灯で明るいとかね。

戸恒 大学では建築を学びましたが、光に戻り、卒業後は事務所に入り、その後、自分の会社を起しました。ヨーロッパの光もいいけど、日本のはっきりさせない曖昧さもいい、と思いました。

仁木 日本の大切なDNAを生かしたデザインですね。

地球にやさしく環境時代にふさわしい象徴性

戸恒 同時にエコや環境を考える

時代でエネルギー量をあまり使えなくなってきたときに、0と100に分配するのか、40と60に分配してつくるかは自由だし、もっと淡い霞のような水墨画のような世界に入った気がします。

スカイツリーは、最先端の技術を駆使し、環境時代の21世紀にふさわしい省エネルギーと美しさが両立するシンボルとして、過去と未来をつないで耀きます。

仁木 なるほど、ほかしのような日本人らしい微妙さですね。

スカイツリーのライティングで影が多いところも好きです。

ところで、世界一のお仕事をされて、生活は変わりましたか？

戸恒 まったく変わらないですね。

仁木 そこが戸恒さんのお人柄が良いところだと思います(笑)。

戸恒 人柄とデザインって関係あると思います。僕がもし変わってしまったら、次にスカイツリーのような質のものはできないです。

仁木 デザインは結果ですが、人の心や気持ちや健康状態が、健全でないと、人を感動させるものではないですね。



東京スカイツリーの秘密

戸恒 江戸の文献をたくさん読みましたが、江戸ってかっこいいんですよ。タイムマシンがあったら、江戸に旅行に行きたいと思います。

仁木 ある意味アバンギャルドね。

私のデザインは、凛としたところが美しいといわれますが、スカイツリーのデザインを見たときも、そんな印象を受けました。

戸恒 嬉しいです(笑)。昨日も街にずっと素直にはまっていたので、うまくいったと思いました。

仁木 スカイツリーについて、これまでお話されていない秘密があったら教えてください(笑)。

戸恒 秘密？ありますよ！30分見ていると、出会う光があるんです。



ユニコロ心斎橋

ちょっと見ただけでは気づかないけれど、30分見ていると1回は出会える何かがあります。

仁木 まあ、それは楽しみ！

商業施設も多く手がけていらっしゃいますね。

戸恒 ホテル日航東京のルーチェ・マーレが、独立して最初の代表作で、レインボーブリッジと東京タワーを望むガラス張りのチャペルです。完全に借景で、「青」を使って、景色を丸ごと全部コンセプトにした欲張りな提案です。

浜離宮の照明は、照明設備がない庭園で、自分たちで発電機を持ち込んで、イベント中は10日間毎日灯油を入れてライティングしました。ただ明るいだけではつまらないので、5分置きに色を変え、歩いている人は、「さっき青かったところが緑になっている！」と、景色の変化に気づくんです。空間の意図を感じてくれることを初めて実感した仕事でした。

また、住宅の仕事は独立して以来コツコツと続けています。住宅の光って、距離が近いし、住まい手がずっと時間を過ごすので、光の位置が重要です。光が全体の雰囲気をつくり、それが暮らしの明かりになる…物語があるんです。

ユニクロの案件は、初めての都市スケールの仕事です。心斎橋という、派手な場所で「シンボルになる光にしたい」と言われましたが、周りのネオンの過激さにどうしようと思いました。

仁木 周りが派手だと、埋もれてしまいますよね。ちょっと地味にし

Curious Eyes of a Witch

た方が、存在感が生まれる(笑)。

戸恒 結果、正方形に光るだけではなく滲むような光を出し、きれいな質に目が向くようにしました。

派手すぎるものって、ノイズになりますよね。

仁木 ノイズにしないのは、日本人の得意とするところですね。

戸恒 街にいい影響を与えたという声をいただきました。

仁木 今後は何をなさりたい？

戸恒 次は宇宙ステーションかなあ(笑)。

日本では街の明かり、光の文化など、パブリックに影響がある仕事を続けていきたいですね。

同時に海外、アジアのなかの日本というテーマもあります。

仁木 たくさん引き出しがおありなので、世界のあちこちで戸恒さんの照明デザイン作品を拝見できるのを楽しみにしています。ありがとうございました。

戸恒 浩人 Hirohito Totsune

照明デザイナー

1975年生まれ、東京都出身。小学校5年生から、父親の仕事でベルギーに3年間在住。ヨーロッパで見た照明に強く心惹かれる。97年東京大学工学部建築学科卒業。照明デザイン事務所LPAを経て、05年シリウスライティングオフィスを設立し、住宅・商業施設・病院など幅広い照明デザインを手がける。07年に粋と雅をコンセプトとしたデザイン提案が評価され、東京スカイツリーのライティングデザイナーに選ばれる。陰翳礼讃を体現する作品世界で、今最も注目される照明デザイナー。

仁木 洋子 Yoko Luna Niki

空間演出プロデューサー

熊本市生まれ。多摩美術大学立体デザイン卒業。展示会や施設などさまざまな環境演出デザインやプロデュースを行なう。地球環境・資源保護に配慮したその仕事は、欧州でも評価され国内外で積極的に活躍。02年よりトヨタ自動車やレクサスの世界のモーターショーブースデザインを担当し、数々のデザイン賞を受賞。06年から東京・丸の内・有楽町周辺で12月の「ライティング・オブジェ」アート・チャリティ展を主催。(社)日本空間デザイン協会副会長。



ホテル日航東京 LUCE MARE
写真：金子俊男



浜離宮恩賜庭園 中秋の名月と灯り遊び
写真：金子俊男